

はじめに

かつて、その本態や病態に迫る手段に欠けるがために、あいまいなままに扱いかねてきたいくつかの皮膚疾患が、最近、生物科学の分野での目の覚めるような進歩とともに、急にその本態がはっきり分かりはじめてきた。また一方、新しい疾患概念として打ち立てられ、多くの人たちに受け入れられはじめた、いわば話題の疾患も私たちの皮膚科の領域に次々と現れてきている。もちろん、それは個々の疾患だけには限らない。疾患の病態をはっきりと把握するのに重要な役割を演ずる研究手段の面においても言えることで、最近、数多く、しかも多方面にわたり私たちの臨床の場での新たな強力な武器となるべき方法が登場しはじめた。それらは多分、多くの臨床医にとって、まだ原理的な面からもなじみの薄いものであろう。

さらにまた、解明されてきた疾患の発症機序に即した考えに基づき、あるいは偶然の機会に観察眼の鋭い臨床医の眼に止まったことが幸いし、これまでは予想もされなかった皮膚疾患の新しい治療法が登場しつつあり、それらも私たちの重要な武器になろうとしている。

一方現実には、生物科学の急速な進歩と歩調を合わせ加速度的にふくれ上がりつつある医療情報は、多くの専門書や専門雑誌にあふれている。その中から、限られた時間のうちにまとまった形で必要な知識を整理してゆくことはますます困難となりつつある。学会であっても同様に、同時に平行して多数の会場で発表されるものの中から、いかに能率的に必要な情報だけを拾い集めようと努力しても、もはや至難の事実を前に困憊して終わる結果にならざるを得なくなっている。

このような時代の流れに呼応して、これまで臨床的研究

論文や症例報告の場としての働きを中心としてきた本誌が、新機軸を打ち出すものとして企画し、生まれ出たものが今回の特集である。この特集の内容は皮膚科領域の最近の動きの中で、編者らの目に止まったものの中から選び出されたものである。執筆者の方々には、限られた期間でしかもかなり限られた紙幅の中に、テーマに沿った形で内容を分かりやすくまとめて欲しいという編者らの無理なお願いに応えていただき、期待以上の論文をお寄せいただいた。内容の選び方は編者らの興味から生まれたものではあるが、なるべく偏りを避けるように努めた。しかし、十分カバーしきれなかった分野のあることは否めず、それは今後の特集号に待ちたい。

ひとまず、本誌初めての企画である「臨床皮膚科 - 最近のトピックス Clinical Dermatology 1989」が読者の方々の好奇心を少しでも満たし、また各テーマの理解を深めることができれば幸いである。

編 者